

## 『銀河鉄道の夜』から (4) 二つのエピソード

藤原 道夫

銀河鉄道の車内で日本の仏教説話にあるような二つのエピソードが出てくる。

一つはタイタニック号に乗って遭難した2人の子供と青年家庭教師のこと。

あたりにりんごの匂いが漂う。6つばかりの男の子がはだしで立ってがたがた震え、隣にいる背の高い青年の手をしっかりと握っている。その後ろに12歳ばかりの少女(かおる)が「ここどこでしょう」と青年にすがりながら外を眺めている。3人が席に落ち着いた後に、同乗していた灯台守が「あなたたちどうしたのでしょうか」とたずねると、青年は船が氷山に激突して沈没しかけた時のことを話し出す。救命ボートが下ろされるや人々が我先へとボートに乗る所に押し寄せた。子供と女性が優先とはいえ乗れる人数には限りがある。青年はせめて預かった子供たちを助けたいと願ったが、人を押しつけて助けるよりこのまま神のお前に行くほうが本当に幸福だとも思った。灯台守は「なにがしあわせかわからないです・・・」と慰めながら立派なりんごを差し出した。

もう一つは劇中劇のような蠍の火の話。

列車が川を渡ると俄かに向こう岸が明るくなる。「蠍の火だな」とカンパネルラが地図と首っ引きして答える。かおるが「蠍の火のことなら知っている、お父さんから聞いた」と言う。

バルドラの野に一匹の蠍がいて虫などを食べて生きていた。ある日天敵のいたちに見つかり、必死に逃げた末に井戸に落ちた。蠍はもうどうにもならず嘆き祈る「どうしてわたしをいたちに呉れてやらなかったのだろう、こんなむなしく命をすてずどうかこの次にはまことの幸いのために私のからだをおつかい下さい」。蠍の体はいつしか真っ赤に燃えて辺りを照らすようになった。

灯台守が「ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」と慰める。では本当の幸福とはどんなことだろう、賢治は「人のために死ぬのもいとわないこと」と言いたいようだ。